

## 編集後記

島田 圭

(神奈川県立図書館紀要編集会議座長)

今年もまた県内各地で梅花咲き誇る季節に「神奈川県立図書館紀要」をお届けすることができました。

1年おきに発行している当館紀要ですが、第13号となる今号は、館内の企画展示に関する記録や所蔵図書の特徴的な装丁に関する論文、県内大学との生涯学習に関する連携事業の紹介のほか、当館本館で発生した漏水事故に関する記録、県立の図書館としての存在意義が問われる戦略的広報に関する論文など、例年以上に幅広い分野にわたる6本の論文から構成されています。

また、執筆陣も司書職員だけでなく、県立高校から異動してきた教員籍の職員2名や、当館が初めての職場となる行政職の職員などバラエティに富んだメンバーとなりました。

今号の論文の中で特に特徴的なのは、一昨年（2016年）11月に発生した本館漏水事故により汚損した資料の修復等に関する記録です。

この本館漏水事故は、すでに使用していない空調配管の末端処理を施工業者が適切に行っていなかったために発生した事故ですが、新しい空調システムを稼働した際に突然天井から赤錆を含んだ水が本館1階の閲覧室に降りそそぐという当館にとっては前代未聞の事故でした。詳しいことは論文に記載されていますが、当日、在館していた職員が一丸となりバケツリレー等により排水を行うとともに、水に濡れた資料の救出と利用者対応を迅速に行ったため大きな混乱も無く、汚損した資料も短い期間で元に戻すことができたことなどが評価され、この事故の対応に関わった職員19名は、後日、県教育委員会の表彰を受けています。

また、県立図書館としてのブランド、広報戦略に関する論文は、一昨年（2016年）10月に公表した「県立図書館の再整備に向けた基本的な考え方」の中で示した目指すべき図書館像「価値を創造する図書館」、「魅せる図書館」

の具体的検討に取り組んでいる当館にとって実にタイムリーなテーマです。

インターネットの普及や活字離れなど、全国的に図書館の利用は落ち込んでおり、図書館をめぐる環境は転換期を迎えています。そのような厳しい状況の下では、図書館自らが「発信力」、「ブランド力」を高め、その存在価値（意義）を広く認めてもらう努力をしなければ、理想とする図書館運営のための予算を確保することさえできません。

当館には日ごろから御利用いただいている方々だけではなく、910万県民を初め、企業・団体といったステークホルダーがいます。今後は、情報発信力、ブランド力を高め、当館を利用いただいている方々はもちろんのこと、当館を直接利用しない方々にも県立の図書館としての存在価値（意義）を認めてもらえるよう努力していく必要があります。

当館は県立図書館としては全国で2番目に遅く設置されたことから、先行する他館に追いつくため、諸先輩方はたいへん苦勞されたと聞いています。そういった努力があって、現在では、明治以降約150年間のベストセラー・コレクションである「ベストセラーズ文庫」や、全国の地方自治体が編集刊行した市町村史を集めた「全国市町村史資料」など、他館に誇れる多くのコレクションを有し、県民の方々の「研究支援」、「学び直し」に寄与していると自負しています。

また本館の建物は、ル・コルビュジエに師事し、戦後モダニズム建築の旗手とされる前川國男氏の代表作の一つとして名高い建築物であり、全国はおろか海外からも建物を観るために人々が集まってきます。

当館の存在価値（意義）を認めてもらうには、こうした当館の特徴、強みを最大限活用し、広く発信していくことが重要ですが、それを若い職員が論説してくれたのはとても嬉しいことです。

当館は再整備に向け、新たな図書館像の実現にむけて取り組んでいきますが、次号の紀要ではその進捗状況等が報告できればと思っています。

最後に、今号の執筆を担当した職員の日ごろの研鑽に改めて敬意を表しますとともに、当館にかかわる全ての皆様に謝意を申し上げ編集後記といたします。